
生かされているということ
―弟から受け取った命―
村越正道

目次

プロローグ　弟をよろしくお願いします
第一章　病気を知らなかった十七歳
第二章　青春と代償
第三章　卒業への執念
第四章　社会人として生きる
第五章　腎不全への坂道
第六章　透析か、移植か
第七章　決断の夏
第八章　移植前夜
第九章　命のバトン
第十章　叫び声の向こう側
第十一章　東京での療養生活
第十二章　日常という贈り物
第十三章　受け継いだもの
終章　託された時間
あとがき

『生かされているということ』

―弟から受け取った命―

プロローグ

「弟をよろしくお願いします。」

それが私の最後の言葉だった。

白く眩しい手術室の照明が視界いっぱいに広がっている。

天井の無機質な光を見つめながら、私は手術台の上に横たわっていた。

周囲では看護師たちが慌ただしく動き回っている。

医師たちは手術の準備を進めている。

様々な機械の音が静かに鳴り響いていた。

しかし、その時の私にはそんなことはどうでもよかった。

気になっていたのは、ただ一人だった。

弟である。

視線を右側へ向ける。

そこにはもう一台の手術台があった。

弟が横たわっている。

私よりも六歳若い弟。

幼い頃から後ろをついて歩いていた弟。

私が大好きな弟。

その弟が今、私のために手術台の上にいる。
私はその光景を見ながら、どうしても現実とは思えなかった。
数時間後には、弟の腎臓が私の身体の中で動いている。
本来ならば決して交わるはずのない運命だった。
もし高校二年の夏に、あの尿検査で異常が見つからなければ。
もし私がもっと自分の身体を大切にしていたなら。
もし病気が進行しなければ。
もし透析だけで生きる決断をしていたなら。
今日という日は訪れなかった。
だが、人の人生に「もし」はない。
私たちは今ここにいる。
弟は自らの意思で腎臓を提供することを決意した。
私はその善意を受け取ることを決意した。
そして今、それぞれの人生を乗せた手術が始まろうとしていた。
弟もこちらを見ていた。
言葉はなかった。
もう何を言っても足りないと思った。
ありがとう。
ごめん。
無理をさせてしまった。

そんな言葉が次々に頭の中に浮かんでは消えていく。
だが結局、何も言えなかった。
ただ目を見つめることしかできなかった。
ほんの数秒だったと思う。
しかし私には永遠にも感じられた。
その瞬間、様々な記憶が一気によみがえってきた。
秋田の空。
学校の校庭。
部活動の汗の匂い。
フォークギターの音。
病院のベッド。
診察室で告げられた病名。
透析室の天井。
励ましてくれた友人たち。
作り笑顔で見送ってくれた母。
無口なまま背中を押してくれた父。
「兄貴に使ってほしい。」
そう言ってくれた弟たち。
すべての出来事が走馬灯のように頭の中を駆け巡った。
気がつけば、二十年以上の歳月が流れていた。

病気は私から多くのものを奪った。
自由を奪った。
健康を奪った。
未来への安心を奪った。
だが同時に、多くのものも与えてくれた。
人の優しさ。
家族の絆。
生きる意味。
そして何より、自分は一人では生きていないという事実を教えてくれた。
私はこれまで、自分の力で生きてきたつもりだった。
努力し、働き、考え、決断し、それによって人生を切り開いてきたと思っていた。
しかしそれは違った。
私がここにいるのは、数え切れないほど多くの人々に支えられていたからだった。
そのことに気づくまで、ずいぶん長い時間がかかった。
そしてそのことを教えてくれたのもまた、病気だった。
麻酔科医の声が聞こえた。
「これから麻酔を始めます。」
私はゆっくりとうなずいた。
腕に取り付けられた点滴から薬剤が流れ込んでくる。
少しずつ意識が遠のいていく。

私は最後の力を振り絞るように、執刀医へ声をかけた。
「弟をよろしくお願いします。」
医師は力強くうなずいた。
それを見届けた時、不思議なほど心が落ち着いた。
もう後悔はなかった。
不安もなかった。
ただ一つだけ願いがあるとすれば、弟が無事でいてくれることだった。
私の意識はゆっくりと暗闇の中へ沈んでいった。
そして私は、この物語の始まりへと戻っていく。
十七歳の夏。
病気とは無縁だった一人の少年のもとへ

第一章　病気を知らなかった十七歳

十七歳の私は、自分が病気になるなど考えたこともなかった。
秋田の夏は短い。
だからこそ、その季節は特別だった。
高校二年生の夏休みを前にしたある日、校庭には強い日差しが降り注ぎ、グラウンドからは掛け声が聞こえていた。窓を開ければ蝉の鳴き声が流れ込んでくる。
私はそんな風景の中にいた。
特別なことは何もない。
どこにでもいる高校生だった。
ただ毎日が楽しかった。
高校には体操部がなかった。
中学まで続けていた体操競技を続けられなかったことは少し残念だったが、その代わりに新しい世界に出会った。
音楽だった。
当時、フォークソングが流行していた。
ラジオから流れてくる曲を聴きながら、仲間たちとギターを弾き、歌を歌う。
放課後になると自然と仲間が集まった。
教室の隅だったり、部室代わりに使っていた空き教室だったり。
誰かがギターを持ち出し、誰かが歌い始める。

気が付けば夕方になっている。
そんな毎日だった。
将来のことなど深く考えてはいなかった。
病気のことなど、もちろん考えたこともなかった。
人は若い頃、自分だけは大丈夫だと思っている。
私もそうだった。
身体は丈夫だった。
風邪もめったにひかなかった。
疲れを感じることもなかった。
だから健康診断で尿検査の異常を告げられても、たいして気にも留めなかった。
タンパク尿が出ている。
再検査を受けるように。
そう言われても、
「ふーん」
という程度だった。
友人たちも同じような反応だった。
誰も深刻そうな顔はしていなかった。
もちろん私自身もそうだった。
身体に異常など何一つ感じていなかったからである。
走れる。

歌える。
笑える。
病気だと言われても実感が湧かなかった。
再検査でも結果は変わらなかった。
そして私は夏休みを利用して秋田市の中通病院へ入院することになった。
人生で初めての入院だった。
両親は心配していた。
特に母は不安そうだった。
だが当の本人は意外なほど気楽だった。
病気への不安よりも、初めて経験する入院生活への好奇心の方が大きかったのである。
病院へ入って最初に驚いたことがあった。
周囲に若い患者がほとんどいなかったことだった。
見渡しても高齢の患者ばかりである。
十七歳の私は完全に浮いていた。
どこか場違いな場所へ来てしまったような気がした。
それでも私はすぐに病棟の生活に慣れた。
実習中の看護学生が担当につき、年齢が近かったこともあって話も弾んだ。
病室には笑い声もあった。
今思えば、私は病人というより入院生活を楽しんでいる高校生だった。
そんなある日、腎生検を受けることになった。

腎臓の組織を採取する検査である。
検査そのものよりも、その後の八時間の絶対安静の方がつらかったことを覚えている。
若かった。
じっとしていることが何より苦痛だった。
それでも私は深刻には考えていなかった。
この検査が終われば、また元の生活に戻る。
その程度に思っていた。
ところが現実は違った。
検査から一週間ほど経ったある日、診察室へ呼ばれた。
静かな部屋だった。
机の向こうには主治医が座っていた。
私は何気なく椅子に腰掛けた。
医師は検査結果の説明を始めた。
難しい言葉も多かった。
だが、その中で一つだけ強く記憶に残っている言葉がある。
「慢性糸球体腎炎です」
初めて聞く病名だった。
もちろん意味も分からなかった。
私は首をかしげた。
医師は丁寧に説明してくれた。

腎臓の働きが弱くなっていること。
すぐにどうなる病気ではないこと。
しかし将来的には悪化する可能性があること。
そして。
透析が必要になる場合もあること。
透析。
その言葉だけが妙に耳に残った。
だが、その時の私は透析がどのような治療なのかも知らなかった。
自分の未来の話だとも思わなかった。
十七歳だった。
遠い未来のことなど想像できなかったのである。
診察室を出たあと、私はいつもと変わらず病院の廊下を歩いた。
窓の外には夏の青空が広がっていた。
蝉の声も聞こえた。
世界は何も変わっていなかった。
それなのに、あの日を境に私の人生は少しずつ違う方向へ進み始めていた。
もちろん、その時の私は知らない。
十二年後、自分が透析を受けることになることも。
さらにその先で、弟から腎臓を受け取ることになることも。
まして、その出来事によって人生そのものの意味を考えるようになることなど、想像もしていな

かった。

十七歳の夏。

病気を知らなかった少年は、まだ人生の本当の試練の入り口に立ったばかりだった。

第二章　青春と代償

退院してしばらくすると、私の生活は元通りになった。
いや、元通り以上だったかもしれない。
病院のベッドで過ごした時間を取り戻そうとするかのように、私は毎日を全力で走っていた。
学校へ行く。
仲間と会う。
ギターを弾く。
歌う。
笑う。
十七歳の私は、再び青春の真ん中に戻っていた。
慢性糸球体腎炎。
診察室で告げられた病名は知っていた。
だが、その病名が持つ重さを理解していたとは到底言えない。
薬は処方されていた。
通院も続いていた。
しかし病気は生活の中心にはなかった。
私の頭の中を占めていたのは友人のことだった。
音楽のことだった。
そして、これから迎える高校生活最後の一年のことだった。

病気に人生を奪われるつもりはなかった。
今思えば、そんな反発心もあったのかもしれない。
高校三年生になると、毎日はさらに忙しくなった。
放課後になると仲間たちが集まる。
ギターケースを抱えて教室に向かう。
窓の外では夕陽が校舎を赤く染めていた。
誰かがコードを鳴らす。
それに合わせて歌が始まる。
私たちは何時間でもそこにいられた。
今振り返ると、不思議な時間だった。
歌が上手かったわけではない。
プロを目指していたわけでもない。
ただ仲間と同じ時間を過ごすことが楽しかった。
それだけだった。
放課後が終わればアルバイトだった。
レストランの厨房に入り、皿を洗い、配膳を手伝う。
帰宅するのは夜遅くだった。
家へ帰れば、今度は翌日の準備がある。
気が付けば深夜になっている。
睡眠時間は決して十分ではなかった。

それでも若かった。
朝になれば身体は動いた。
だから無理をしているという自覚もなかった。
むしろ忙しいことが誇らしかった。
仲間と笑い合いながら、
「今日も疲れたな」
と言うのが楽しかった。
そんな毎日だった。
一番悪かったのは薬だった。
正直に言えば、真面目に飲んでいなかった。
机の引き出しを開けると飲み忘れた薬が残っていた。
母から注意されることもあった。
「ちゃんと飲みなさい」
そう言われても、
「大丈夫だって」
と笑って済ませていた。
病気を甘く見ていた。
それが事実だった。
十代の私には、自覚症状のない病気の怖さが分からなかったのである。
そんな日々の中で、高校生活最後の文化祭が近づいてきた。

私たちフォークソング同好会にとっても最後の舞台だった。
自然と力が入った。
演奏する曲を決める。
練習する。
仲間と意見をぶつけ合う。
帰りはますます遅くなった。
文化祭が近づくほど、学校にいる時間も長くなった。
疲れているはずだった。
だが充実していた。
今しかない時間だと思っていた。
若さとは不思議なものだ。
永遠に続くわけではないからこそ輝く。
だが、その時の私はそんなことを知らなかった。
文化祭当日。
会場は多くの生徒たちで埋まっていた。
照明が点く。
歓声が上がる。
ステージへ上がった瞬間の高揚感を、私は今でも覚えている。
スポットライトが眩しかった。
客席の顔は見えない。

ただ熱気だけが伝わってきた。
ギターを抱え、仲間たちと演奏した。
楽しかった。
本当に楽しかった。
演奏が終わった瞬間、
「終わった」
と思った。
やり切った。
高校生活の中でも指折りの充実感だった。
だが、数日後から身体に異変が起き始めた。
最初は風邪だと思った。
喉が痛い。
身体がだるい。
熱っぽい。
誰にでもある症状だった。
ところが、いつまで経っても良くならない。
それどころか悪くなっていった。
身体が重い。
異常なほど重い。
足に力が入らない。

階段を上るだけで息が切れる。
教室へ向かうだけで疲れる。
私は戸惑った。
こんなことは初めてだった。
ある朝、起き上がろうとしても身体が動かなかった。
鉛のように重かった。
その時、初めて恐怖を感じた。
何かがおかしい。
風邪ではない。
そう思った。
再び病院へ向かった。
検査が続いた。
病室の天井を見上げる時間が増えた。
そして主治医から説明を受けた。
腎機能が大きく低下していた。
正常の半分以下。
その言葉を聞いた瞬間、頭の中が真っ白になった。
文化祭の歓声が遠く聞こえたような気がした。
仲間たちの笑顔も浮かんだ。
ついこの間まで、あれほど元気だった。

それなのに今は病院のベッドの上にいる。
私は何も言えなかった。
主治医の言葉を聞きながら、ただうつむいていた。
今なら分かる。
身体はずっと警告を発していた。
疲れやすくなっていた。
薬も飲まなかった。
睡眠も不足していた。
無理を繰り返していた。
病気は突然悪化したわけではなかった。
私が気づかなかっただけだったのである。
病室の窓から見える空は高かった。
文化祭の日と同じ秋の空だった。
だが私の見ている景色は、あの日とはまったく違っていた。
健康は当たり前ではない。
若さだけでは乗り越えられない現実がある。
そのことを私は初めて知った。
だが、それでもまだ分かっていなかった。
この先に待っている長い闘病生活のことも。
透析という現実のことも。

そして弟から腎臓を受け取る日がやって来ることも。
私はまだ、その入り口に立ったばかりだった。

第三章　卒業への執念

病院の窓から見える木々は、いつの間にか冬の色に変わっていた。

再入院してから、一か月近くが過ぎていた。

毎日、同じ天井を見て過ごしていた。

朝になる。

看護師さんが来る。

検温がある。

食事が運ばれてくる。

消灯になる。

また朝が来る。

そんな繰り返しだった。

体調は少しずつ回復していた。

だが、別の不安が日に日に大きくなっていた。

学校だった。

友人たちは今も教室にいる。

授業を受けている。

卒業後の進路について話し合っている。

私は病院にいる。

窓の外を見ながら、そんなことばかり考えていた。

病気になる前には考えたこともなかった孤独だった。
夕方になると病室が静かになる。
面会の時間も終わる。
窓ガラスに映る自分の顔を見ながら、
「みんな何しているんだろうな」
そんなことを考えていた。
高校生活最後の冬だった。
本来なら友人たちと同じ時間を過ごしているはずだった。
進学する者。
就職する者。
それぞれが人生の分かれ道に立っていた。
ところが私は病院のベッドの上だった。
悔しかった。
正直に言えば焦っていた。
病気よりも学校が気になって仕方がなかった。
やがて退院の日が来た。
外へ出ると冷たい風が頬を打った。
久しぶりだった。
病院の空気とは違う。
冬の匂いがした。

空は高く青かった。
それだけで少しうれしかった。
ようやく戻れる。
そう思った。
だが現実は甘くなかった。
身体は思うように動かなかったのである。
少し歩くだけで疲れる。
階段を上るだけで息が切れる。
病気になる前の身体とはまるで違っていた。
学校へ復帰してからも苦労した。
朝起きるのがつらい。
授業中も疲れてしまう。
集中力が続かない。
以前なら何でもなかったことが、大きな負担になっていた。
欠席も増えていった。
体調が悪くなるたびに休んだ。
通院もあった。
高校生活最後の一年は、想像していたものとはまったく違うものになっていた。
そんなある日のことだった。
担任の先生から呼び出された。

職員室へ向かう足取りは重かった。
何となく嫌な予感がしていた。
先生は出席簿を開いていた。
その表情は真剣だった。
私も椅子に座った。
少し沈黙があった。
そして先生が口を開いた。
「このままだと卒業できないぞ」
その言葉は重かった。
頭を殴られたような気がした。
卒業できない。
考えたこともなかった。
病気のことばかり考えていた。
だが高校には決まりがある。
出席日数が足りなければ卒業できない。
当たり前のことだった。
私は返事ができなかった。
先生も私の顔を見ていた。
しばらく沈黙が続いた。
やがて先生は静かに言った。

「何とか卒業させたいと思っている」
その言葉は今でも忘れられない。
私は決して優等生ではなかった。
先生方には心配ばかりかけていた。
それでも見放さなかった。
卒業させたいと考えてくれていた。
胸が熱くなった。
そして補習が始まった。
友人たちは春休みを迎えていた。
進学する者は新しい生活の準備をしていた。
就職する者は社会人になる準備をしていた。
ところが私は学校へ通っていた。
誰もいない校舎。
静かな図書室。
休日の教室。
ストーブの音だけが聞こえる。
机に向かって勉強していると、時々寂しくなった。
みんなはもう先へ進んでいる。
自分だけが置いていかれている。
そんな気持ちになることもあった。

だが不思議と諦めようとは思わなかった。
先生たちがいたからだった。
補習のたびに声を掛けてくれた。
体調を気遣ってくれた。
応援してくれた。
その気持ちに応えたいと思った。
そして春が近づいてきた。
世間では卒業式の季節だった。
同級生たちは卒業証書を受け取り、それぞれの道へ進んでいった。
私はその場にいなかった。
少し悔しかった。
本当なら同じ日に卒業するはずだったからである。
それでも補習は続いた。
雪が解け始めても続いた。
ようやく最後の補習が終わったのは三月の終わりだった。
そして四月一日。
私は卒業証書を受け取った。
華やかな卒業式ではなかった。
校歌もなかった。
拍手もなかった。

だが私にとっては、一生忘れられない卒業式だった。
その時だった。
外から声が聞こえた。
振り返ると、友人たちが立っていた。
卒業を祝うために集まってくれていたのである。
進学した友人もいた。
就職した友人もいた。
それぞれ新しい生活が始まっている。
それなのに私を待っていてくれた。
私は言葉を失った。
うれしかった。
本当にうれしかった。
病気になってから、自分は一人だと思うことがあった。
なぜ自分だけが。
そんなことを考えたこともあった。
だが、その日は違った。
私は一人ではなかった。
先生がいた。
友人がいた。
家族がいた。

支えてくれる人たちがいた。
卒業証書よりも、そのことの方が心に残った。
振り返れば、高校卒業は人生で最も苦労した卒業だったかもしれない。
だが、あの経験があったからこそ知ることのできたものもあった。
人は弱くなる。
一人では前へ進めないこともある。
そんな時、支えてくれる人がいる。
私はそれを十代の終わりに知った。
そしてその学びは、この先待ち受けている長い闘病生活の中で、何度も私を支えることになるのである。

第四章　社会人として生きる

高校を卒業した春のことを、今でもよく覚えている。
長かった。
本当に長かった。
病気が見つかり、入院し、留年の危機を乗り越え、ようやく手にした卒業証書だった。
だから卒業した時には、正直ほっとした。
これでようやく前へ進める。
そんな気持ちだった。
病気は抱えていた。
だが、まだ若かった。
病気への不安よりも、新しい人生への期待の方が大きかったのである。
私は専門学校へ進んだ。
経理や簿記を学ぶためだった。
商売を営む家庭で育ったこともあり、数字を扱う仕事には以前から興味があった。
高校とは違う環境だった。
新しい校舎。
新しい友人たち。
新しい勉強。
病院とは関係のない毎日が始まった。

それだけでうれしかった。
もちろん通院は続いていた。
薬も飲んでいた。
だが病気は生活の中心にはなかった。
授業があり、仲間がいて、将来への夢があった。
二十歳前後の若者にとって、それらの方がはるかに重要だった。
その頃、私は相変わらず音楽に夢中だった。
高校時代に始めたフォークソングへの情熱は消えていなかった。
縁があってライブハウスの運営にも関わるようになった。
昼は学校。
夜はライブハウス。
忙しい毎日だった。
ライブの日になると店の中は独特の熱気に包まれた。
ステージの照明が灯る。
演奏が始まる。
観客が歓声を上げる。
音楽に身を委ねる人たちの顔を見るのが好きだった。
あの空間にいる間だけは、病気のことを忘れることができた。
私は患者ではなかった。
ただ音楽が好きな若者だった。

さらに塾講師の仕事もしていた。
夕方になると教室へ向かい、生徒たちに勉強を教える。
最初は苦労した。
自分では理解していることを、相手に分かるように伝えるのは難しかった。
それでも、生徒が問題を解けるようになった時の表情を見るのはうれしかった。
「先生、分かった」
そう言われるたびに、自分までうれしくなった。
振り返ってみると、その頃の私は本当によく働いていたと思う。
学校へ行く。
ライブハウスへ行く。
塾で教える。
毎日予定が埋まっていた。
だが不思議と苦ではなかった。
若かったのである。
忙しいことそのものが楽しかった。
将来への可能性が無限に広がっているような気がしていた。
やがて専門学校を卒業する頃になると、父から声を掛けられた。
家業を手伝ってみないか。
わが家は時計店を営んでいた。
地域の人々に支えられながら続いてきた店だった。

父は以前から店を継ぐ者のことを考えていたのだと思う。
私も少し考えた。
別の会社へ就職する道もあった。
しかし最終的に私が選んだのは家業だった。
育ててもらった家への恩返しをしたいという思いがあった。
父や母の力になりたいとも思った。
こうして私は時計店へ入った。
そして能代支店で一人暮らしを始めることになった。
初めての一人暮らしだった。
自由だった。
何時に起きてもいい。
何を食べてもいい。
誰にも文句を言われない。
学生時代には想像もしなかった生活だった。
アパートに帰ると静かだった。
最初は少し寂しかった。
だが、そのうちその自由が心地よくなった。
仕事も楽しかった。
時計の修理を覚える。
接客を覚える。

商品の仕入れを覚える。
毎日新しいことばかりだった。
小さなネジを扱う細かい作業も嫌いではなかった。
お客様との会話も好きだった。
店にはさまざまな人がやって来る。
時計の電池交換を頼む人。
思い出の時計の修理を頼む人。
結婚記念日の時計を探しに来る人。
時計一つにも、それぞれの人生があった。
その話を聞くのが好きだった。
少しずつ地域の人たちにも顔を覚えてもらえるようになった。
店の前を歩く人が手を振ってくれる。
買い物帰りに立ち寄ってくれる。
そんなことがうれしかった。
ようやく自分の居場所を見つけたような気がしていた。
病気のことを考える時間も減っていた。
もちろん通院は続いていた。
薬も飲んでいた。
だが病人だという意識はほとんどなかった。
普通に働いていた。

普通に暮らしていた。
だから、この先も同じような毎日が続いていくのだと思っていた。
高校二年生の時に聞かされた病気の話も、どこか遠い未来の出来事のように思っていた。
透析。
腎不全。
そんな言葉は知っていた。
しかし自分に起こる現実としては考えていなかった。
今振り返れば、それは危うい平穏だった。
痛みはなかった。
熱も出なかった。
だから病気の進行が分からなかった。
いや、本当は分かろうとしていなかったのかもしれない。
仕事ができる。
食事ができる。
普通に生活ができる。
それだけで十分だと思っていた。
だが腎臓という臓器は静かである。
文句も言わない。
悲鳴も上げない。
ただ少しずつ、その力を失っていく。

その頃の私には、そのことがまだ分かっていなかった。
時計店の店先でお客様と笑いながら話していたその時も。
夜、一人の部屋で明日の仕事を考えていたその時も。
私の身体の中では、病気が静かに歩みを進めていたのである。
そして、その静かな進行が、やがて私を透析という現実へ導いていくことになる。

第五章　腎不全への坂道

今振り返ると、最初の異変は疲れだったのだと思う。
特別な症状ではなかった。
熱が出るわけでもない。
痛みがあるわけでもない。
ただ疲れるのである。
朝起きても疲れが取れていない。
仕事を終える頃には身体が鉛のように重い。
休日になると横になっている時間が増えていった。
だが私は気にしなかった。
仕事が忙しいからだろう。
そんなふうに考えていた。
二十代後半だった。
時計店の仕事にも慣れていた。
地域のお客様との関係もできていた。
毎日の仕事にはやりがいがあった。
店を開ける。
時計を修理する。
お客様と話をする。

閉店する。
その繰り返しだった。
平凡かもしれない。
だが私にはその平凡な毎日が心地よかった。
病気を抱えていても人生は続いている。
そう思えていた。
高校二年生で腎炎が見つかってから、すでに十年以上が過ぎていた。
通院もしていた。
薬も飲んでいた。
だから自分なりに病気と付き合っているつもりだった。
もちろん検査結果は気になっていた。
診察のたびに数値は少しずつ悪くなっていた。
主治医も説明してくれていた。
腎機能は確実に低下している。
いずれ透析が必要になるかもしれない。
何度も聞いた言葉だった。
だが現実味はなかった。
病気の進行はあまりにもゆっくりだったのである。
昨日と今日で変わるわけではない。
一か月で変わるわけでもない。

だから危機感を持ちにくかった。
いつしか私は、その現実に慣れてしまっていた。
ある日の診察だった。
主治医が検査結果を見ながら尋ねた。
「疲れやすくなっていませんか」
私は思わず苦笑した。
その通りだったからである。
最近の私は疲れていた。
以前よりも明らかに疲れていた。
だが年齢のせいだと思っていた。
仕事のせいだと思っていた。
病気のせいだとは思いたくなかった。
主治医は静かに説明した。
腎機能は前回よりも下がっている。
急激ではない。
しかし確実に進行している。
私は黙って聞いていた。
高校生の頃に言われた言葉を思い出していた。
「将来、透析になるかもしれません」
当時は遠い未来の話だった。

だが、その未来が少しずつ近づいていることだけは分かった。
それでも私はどこかで現実から目を背けていた。
仕事ができているうちは大丈夫。
そう思いたかったのである。
その頃から血圧も高くなっていた。
診察のたびに指摘された。
薬も増えた。
さらに尿酸値も高くなった。
そしてある朝だった。
右足の親指に激痛が走った。
飛び起きるほどの痛みだった。
何かにぶつけたわけではない。
怪我をした覚えもない。
それなのに歩くことさえできない。
病院で診てもらうと痛風だった。
医師は腎機能との関係も説明してくれた。
だが当時の私は、
「酒も飲んでいないのにな」
その程度にしか考えていなかった。
今思えば、身体は必死に警告を送っていたのである。

問題は腎臓だけではなかった。
全身が悲鳴を上げ始めていた。
だが私は、その声をちゃんと聞こうとしなかった。
仕事は続けていた。
身体が重くても店へ行った。
疲れていても接客した。
一人で店を切り盛りする責任もあった。
休みたくても休めなかった。
いや、本当は休もうと思えば休めたのかもしれない。
だが私は休まなかった。
仕事が好きだったのである。
お客様を待たせたくなかった。
何より、自分を病人だと認めたくなかった。
三十歳が近づく頃になると、さらに疲労感が強くなった。
夕方になると集中力が続かない。
少し歩いただけで息が上がる。
階段を上るのが億劫になる。
食欲も落ちていた。
顔色も悪くなっていたらしい。
だが私は気づかなかった。

毎日鏡を見ていると変化は分からない。
そしてもう一つ、奇妙なことが起きていた。
視力だった。
昔は一・二ほど見えていた。
ところが気が付くと〇・六程度まで落ちていた。
私は年齢のせいだと思った。
疲れ目だろうとも思った。
まさか腎不全と関係しているとは想像もしなかった。
すべてが少しずつだった。
だから気づきにくかった。
まるで夕暮れが静かに訪れるように。
気づいた時には周囲が暗くなっている。
そんな変化だった。
やがて再び入院することになった。
病室のベッドに横になりながら天井を見つめていた。
高校時代にも入院した。
あの時は良くなれば元の生活へ戻れた。
だが今回は違う気がしていた。
理由は説明できなかった。
ただ何となく分かっていた。

人生が変わる時が近づいている。
そんな予感だった。
入院中も検査が続いた。
採血。
採尿。
血圧測定。
そして結果が並んでいく。
数字は正直だった。
私の希望とは関係なく、腎機能は低下していた。
ある日、主治医から説明があった。
診察室は静かだった。
先生は検査データを見ながら話し始めた。
私はその表情を見た瞬間に察した。
良い話ではない。
それだけは分かった。
しばらく説明が続いた後、先生は静かに言った。
「そろそろ透析について考えましょう」
その言葉を聞いた時、不思議と驚きはなかった。
いつかは来ると思っていた。
覚悟していた。

だが重かった。

心の奥に沈むような重さだった。

高校生の頃に聞いた言葉が蘇る。

「将来、透析になるかもしれません」

あれから十年以上が過ぎていた。

遠い未来だと思っていたその現実が、ついに目の前まで来ていたのである。

診察が終わり、病院の外へ出た。

空を見上げた。

世界は何も変わっていなかった。

車が走っている。

人が歩いている。

風が吹いている。

だが私だけが立ち止まっていた。

透析。

その言葉の重みを考えていた。

これからどう生きるのか。

仕事は続けられるのか。

普通の生活はできるのか。

答えは何も見つからなかった。

ただ一つだけ分かっていたことがある。

私は人生の大きな分岐点に立っていた。
そして、この時はまだ知らなかった。
その先に、防衛医科大学校病院との出会いがあり。
弟たちの申し出があり。
人生を変える移植という選択肢が待っていることを。
透析への坂道を下りながら、私はまだその先に広がる景色を知らなかったのである。

第六章　透析か、移植か

「そろそろ透析について考えましょう」
主治医の言葉は静かだった。
だが、その一言は重かった。
高校二年生の夏に慢性糸球体腎炎と診断されてから十二年余り。
ずっと先のことだと思っていた未来が、ついに目の前まで来ていた。
病院を出ると、空はいつもと変わらなかった。
人が歩いている。
車が走っている。
街は普段通りだった。
だが私だけが立ち止まっているような気がした。
透析。
その言葉を考え続けていた。
透析についての知識はあった。
週に何度も病院へ通う生活。
食事や水分の制限。
仕事も遊びも透析中心になる。
それでも、透析を受ければ生きていくことはできる。
そう自分に言い聞かせていた。

やがて私は、防衛医科大学校病院を紹介された。
母方の従弟が勤務していたこともあり、透析導入を含めた治療をお願いすることになった。
埼玉県所沢市。
秋田から遠く離れた病院だった。
だが、その頃の私には選択肢はなかった。
少しでも良い治療を受けたい。
ただ、それだけだった。
入院すると検査が続いた。
そして透析が始まった。
本来なら事前にシャントを作り、そこから透析を受けるはずだった。
ところが私は現実を認めたくなかった。
まだ大丈夫だと思っていた。
その結果、準備が間に合わなかった。
左足の付け根からカテーテルを入れて透析を受けることになったのである。
初めて透析装置に接続された時のことを覚えている。
透明な管の中を、自分の血液が流れていく。
それを見つめながら思った。
とうとうここまで来たのだ、と。
透析患者になった。
その現実を受け止めるしかなかった。

ところが透析後、意外な変化があった。
身体が少し楽だったのである。
頭の重さも軽くなった。
長い間、自分では気づかないうちに腎不全が全身へ負担をかけていたのだろう。
複雑な気持ちだった。
透析を受けることになった悲しさと、身体が楽になる安堵感。
その両方があった。
その後、左腕にシャントを造る手術を受けた。
これから透析と付き合っていくための準備だった。
だがシャントが使えるようになるまでには三週間ほどかかる。
その間はベッド上安静だった。
動くこともできない。
時間だけはたっぷりあった。
私は毎日、病室の天井を見ていた。
そして考えていた。
これからの人生を。
仕事を。
家族を。
透析を。
そんなある日だった。

弟たちが病室へやって来た。
次男と三男だった。
昔話をした。
仕事の話をした。
友人の話をした。
いつも通りだった。
病気の話ばかりをしていたわけではなかった。
むしろお互い避けていたのかもしれない。
そして帰る時間が近づいた頃だった。
次男が言った。
「兄貴」
私は顔を上げた。
弟たちは真剣な顔をしていた。
その時の空気が少し変わったことを覚えている。
そして次男が言った。
「俺たちの腎臓を使わないか」
私は言葉を失った。
冗談ではなかった。
二人とも本気だった。
ありがたかった。

本当にありがたかった。
だが、それ以上に戸惑った。
弟たちは健康そのものだった。
仕事もある。
家族もある。
人生もある。
その身体にメスを入れる。
自分のために。
私には受け入れられなかった。
「そんなことできるわけないだろう」
ようやく出てきた言葉がそれだった。
弟たちは反論しなかった。
ただ、
「考えてみてくれ」
と言った。
そして帰っていった。
病室に静けさが戻った。
テレビはついていた。
だが内容はまったく頭に入らなかった。
考えていたのは弟たちの言葉だった。

「俺たちの腎臓を使わないか」
何度も頭の中で繰り返された。
ありがたかった。
本当にありがたかった。
だが、それ以上に怖かった。
透析はつらい。
不自由も多い。
それでも透析で生きていくことはできる。
だが移植は違う。
健康な人間に手術を受けてもらわなければならない。
もし何かあったらどうする。
もし後遺症が残ったらどうする。
もし将来、弟自身が病気になったらどうする。
考えれば考えるほど、移植を選ぶ理由より選べない理由の方が多かった。
ある日、父が病室で言った。
「お前は弟たちのことで悩んでいるんだろう」
私は黙っていた。
図星だった。
父は静かに続けた。
「だがな、それは弟たち自身が決めることだ」

私は反論した。
「でも健康な身体に傷をつけるんだぞ」
父は少し間を置いてから言った。
「それでもやりたいと言っているんだ」
私は何も言えなかった。
父の言葉を否定することができなかった。
母も同じだった。
「篤も覚悟して言っているんだと思うよ」
そう言った。
だが私は納得できなかった。
母の言葉ではなく、自分自身が納得できなかったのである。
透析室へ行けば、さまざまな患者さんたちがいた。
何年も透析を続けている人。
仕事をしながら通院している人。
透析を受けながら人生を送っている人。
私はその姿を見ていた。
そして思った。
自分も透析で生きていける。
それでいいじゃないか。
そう思っていた。

だが別の現実も見えていた。
透析の日はほぼ一日が治療に費やされる。
旅行も簡単ではない。
仕事の予定も透析中心になる。
飲みたい時に水を飲めない。
食べたい物も自由には食べられない。
そして何より、身体が完全に楽になるわけではなかった。
私は少しずつ揺れ始めていた。
そんな中で、移植適合検査を受けることになった。
正直に言えば、その時も私は移植を受けるつもりではなかった。
むしろ結果が悪ければいいと思っていた。
適合しなければ悩まなくて済む。
透析で生きていくと決められる。
そう考えていたのである。
だが運命は、まったく逆の結果を用意していた。
検査結果の日。
私は医師の説明を静かに聞いていた。
次男との移植も十分可能だった。
それだけでも驚きだった。
だが続いて説明された三男の結果に、医師の表情が変わった。

「非常に珍しい結果です」
医師はそう言った。
HLA型がすべて一致していた。
百パーセント適合だった。
医師も驚くほどの結果だった。
私は喜べなかった。
病室へ戻ったあと、しばらく窓の外を見ていた。
秋田の店のこと。
透析のこと。
弟のこと。
何も整理ができなかった。
移植が突然、現実になったのである。
もし適合しなければ。
そう願っていた私にとって、それはあまりにも重い結果だった。
そして私は、この日から人生で最も苦しい決断と向き合うことになる。
移植を受けるのか。
透析を続けるのか。
答えを探す長い夏が始まろうとしていた。

第七章　決断の夏

適合検査の結果を聞いた日、私は素直に喜ぶことができなかった。

三男とのHLA型は完全一致だった。

担当医も驚くほどの結果だった。

移植医療に携わる医師でも、そう頻繁に出会う結果ではないという。

家族は喜んでいた。

弟も喜んでいた。

だが私だけは違った。

病室へ戻ると窓際の椅子に腰を下ろした。

夕暮れの光が病室の床に長く伸びていた。

私はその光をぼんやり眺めていた。

もし適合しなければ。

その時は透析で生きていくと決められたはずだった。

迷う必要もなかった。

ところが現実は違った。

移植という選択肢が突然目の前に現れたのである。

そして、その選択肢はあまりにも魅力的だった。

だからこそ苦しかった。

弟の人生を巻き込んでしまうからだった。

やがて六月になり、私は退院した。
透析患者として秋田へ戻った。
店にも復帰した。
週三回の透析生活も始まった。
生活は元に戻ったように見えた。
だが心は少しも落ち着いていなかった。
病院からは移植予定日として十月六日が示されていた。
もちろん最終決定ではない。
だが移植を前提とするなら、その日に向けて準備が始まる。
カレンダーを見るたびに、その日付が目に入った。
近づいてくる。
少しずつ。
確実に。
それでも答えは出なかった。
透析室へ行けば、様々な患者さんたちがいた。
何十年も透析を続けている人。
仕事を続けながら通院している人。
家族を支えながら生きている人。
皆、それぞれの人生を懸命に生きていた。
私はその姿を見ながら思っていた。

自分も透析で生きていける。
それでいいじゃないか。
わざわざ弟に負担を掛けなくてもいい。
その考えはなかなか消えなかった。
一方で、透析の現実も見えていた。
透析の日は半日が治療で終わる。
仕事の予定も透析中心になる。
旅行も簡単ではない。
水分も自由に飲めない。
食事にも気を遣う。
そして何より、身体が完全に楽になるわけではなかった。
透析は命をつないでくれる。
だが失った腎臓の機能を取り戻してくれるわけではない。
私はその現実を少しずつ理解し始めていた。
そんな頃だった。
知人の紹介で、能代市の長慶寺を訪ねた。
住職は静かな人だった。
私は初対面にもかかわらず、自分の気持ちを話した。
透析のこと。
移植のこと。

弟のこと。
迷っていること。
住職は最後まで黙って聞いてくれた。
結論を押しつけることもなかった。
説得することもなかった。
それがありがたかった。
それ以来、私は毎朝六時に長慶寺へ通うようになった。
六月から九月まで。
ほとんど毎日だった。
まだ薄暗い朝。
静かな境内を歩く。
本堂へ入り、坐禅を組む。
最初は雑念ばかりだった。
透析のこと。
店のこと。
弟のこと。
移植のこと。
次から次へと頭に浮かんでくる。
とても無心などにはなれなかった。
それでも翌日も行った。

また翌日も行った。
毎朝同じ場所へ座り続けた。
坐禅の後には住職との問答があった。
私は繰り返し同じ話をした。
「弟に申し訳ない」
「透析でも生きていける」
「もし弟に何かあったらどうする」
住職は静かに聞いていた。
そして時折こう尋ねた。
「それは誰のための考えですか」
私は答えられなかった。
自分のためなのか。
弟のためなのか。
家族のためなのか。
自分でも分からなかった。
ある日の問答だった。
私はこれまで誰にも話したことのない思いを口にした。
「住職、人は生まれ変わり、死に変わりすると言いますよね」
住職は黙ってうなずいた。
「仏教には宿業という考えがありますよね」

再びうなずきが返ってきた。
私は言葉を続けた。
「前世でつくった業を、今世で背負うことがあると聞きました」
自分でも奇妙な問いだと思った。
だが、あの頃の私は本気で考えていた。
なぜ自分が病気になったのか。
なぜ透析になったのか。
なぜ弟たちにここまで迷惑を掛けることになったのか。
その理由を探していたのである。
「私は前世でよほど悪いことをしたんじゃないかと思うことがあるんです」
本堂には静かな空気が流れていた。
「もしこの病気が宿業なら」
そこまで言って私は言葉を切った。
しばらく沈黙が続いた。
鳥の鳴き声だけが聞こえていた。
やがて私は続けた。
「移植を受けるのは間違いなんじゃないでしょうか」
住職は黙って聞いていた。
「透析になったのも、自分が背負うべきものだからかもしれない」
「それなのに弟の腎臓をもらう」

「しかも健康な弟を傷つけることになる」
私はうつむいた。
「それはさらに大きな罪を作ることにならないでしょうか」
長い沈黙の後、住職が静かに口を開いた。
「村越さん」
私は顔を上げた。
「弟さんは無理やり腎臓を取られるのですか」
私は首を振った。
「違います」
「弟さん自身の意思で申し出ているのですね」
「はい」
住職は静かに言った。
「それは弟さん自身が選んだ行いです」
私は黙っていた。
住職は続けた。
「もし受け取ることが罪なら、人は誰からも何も受け取れなくなります」
その言葉は意外だった。
考えたこともなかった。
「親から命を受け取ることも」
「友人から支えを受け取ることも」

「誰かの親切を受け取ることも」
「すべて罪になってしまいます」
私は何も言えなかった。
住職は穏やかな口調のまま続けた。
「人は一人では生きられません」
「与えることもある」
「受け取ることもある」
「そして、また別の誰かへ返していくのです」
私はその言葉を黙って聞いていた。
住職は最後にこう言った。
「宿業があるかどうかは分かりません」
「ですが、今ここにある弟さんの思いは現実です」
「向き合うべきなのは前世ではなく、その思いではありませんか」
その言葉は深く胸に残った。
私はずっと受け取ることを恐れていた。
だが本当は、弟の思いそのものから目を背けていたのかもしれなかった。
それからも毎朝長慶寺へ通った。
ある日、住職はこう言った。
「受け取る勇気も必要なのではありませんか」
その言葉が妙に心に残った。

それまでの私は与えることばかり考えていた。
弟に迷惑を掛けたくない。
家族に負担を掛けたくない。
それればかりだった。
だが、家族の思いを受け取ることもまた責任なのではないか。
そんな考えが少しずつ芽生え始めていた。
それでも決断はできなかった。
迷いは消えなかった。
九月に入った頃だった。
私は高校時代の恩師を訪ねた。
どうしても話を聞いてほしかった。
先生は私の話を最後まで聞いてくれた。
移植への迷い。
弟への申し訳なさ。
透析で生きる覚悟。
私は全部話した。
先生はしばらく黙っていた。
そして静かに言った。
「移植したくてもできない人がたくさんいる」
私は顔を上げた。

先生は続けた。

「お前には、その機会が与えられている」

私は何も言えなかった。

先生はさらに続けた。

「透析でできることと、移植後にできることは違う」

「せっかくその可能性があるなら挑戦してみたらどうだ」

私はじっと聞いていた。

そして最後に先生は言った。

「その後に何ができるか考えながら生きればいい」

私は言葉を失った。

それまでの私は移植を受けるかどうかしか考えていなかった。

その先の人生について考えたことがなかったのである。

だが先生は違った。

移植後をどう生きるのか。

与えられた人生を何に使うのか。

その話をしていた。

帰り道、私はずっとその言葉を考えていた。

長慶寺へ通う朝も続いた。

坐禅を組みながら考えた。

もし移植を受けるなら。

その先をどう生きるのか。
弟から受け取るものを、どう社会へ返していくのか。
答えは少しずつ形になっていった。
九月の終わり。
いつものように坐禅を終えた朝だった。
私は住職に言った。
「移植を受けようと思います」
住職は静かにうなずいた。
ただ、それだけだった。
だが私の中では大きな決断が終わっていた。
迷いが消えたわけではない。
不安も残っていた。
弟への申し訳なさも残っていた。
それでも覚悟はできていた。
家族の思いを受け取ろう。
弟の決意を受け取ろう。
そして、その先の人生を精一杯生きよう。
そう思った。
振り返れば、長い夏だった。
検査結果が私を決断させたのではなかった。

長慶寺への毎朝の道。
住職との問答。
恩師の言葉。
家族の思い。
そのすべてが少しずつ私の背中を押してくれたのである。
十月が近づいていた。
移植の日は十月六日。
長かった迷いの日々は終わろうとしていた。
そして私は、人生で最も長い夜へ向かって歩き始めていた。

第八章　移植前夜

十月五日。

移植手術の前日だった。

私は秋田駅から寝台列車に乗り込んだ。

列車が静かに動き出す。

ホームの灯りがゆっくりと後ろへ流れていった。

見慣れた町並みが夜の闇に沈んでいく。

窓際に腰を下ろし、私はしばらく外を眺めていた。

翌日には移植手術が待っている。

長い時間をかけて悩み続け、ようやくたどり着いた日だった。

もう答えは出ていた。

あとは明日を迎えるだけだった。

それでも心は落ち着かなかった。

考えていたのは自分のことではない。

弟のことだった。

夜が更けるにつれ、車内は静かになった。

私も寝台に横になった。

だが眠れなかった。

規則正しいレールの音だけが暗闇に響いている。

カタン、カタン。
カタン、カタン。
病名を告げられた十七歳の夏。
卒業を目指して通った補習の日々。
時計店で働いた時間。
透析導入の日。
一つひとつの出来事が、静かによみがえった。
十二年間という歳月が一本の線になり、明日へ続いているような気がした。
気がつくと窓の外が白み始めていた。
列車は東京へ到着した。
そこから病院へ向かった。
防衛医科大学校病院は何度も訪れた場所だった。
だが、その日は違って見えた。
受付を済ませる。
病室へ入る。
採血を受ける。
術前検査が進む。
すべてが淡々と進んでいった。
だからこそ現実味があった。
いよいよここまで来たのだと思った。

弟も同じ病院に入院していた。
何度か顔を合わせた。
私はそのたびに聞いた。
「本当にいいんだな」
弟は困ったような顔をした。
「だから何回聞くんだよ」
返事はいつも同じだった。
それでも聞かずにはいられなかった。
弟は私より六歳下だった。
その弟が、明日、自分のために手術を受ける。
その事実だけは最後まで受け入れ切れなかった。
夕方になると病棟は静かになった。
西日が病室の床を赤く染めている。
面会時間が終わり、人影も少なくなっていった。
私はベッドに入った。
だが、やはり眠れなかった。
目を閉じても眠れない。
しばらく天井を見つめていたが、諦めて病室を出た。
病棟の廊下は静まり返っていた。
遠くで看護師さんの足音が聞こえる。

私はあてもなく歩いた。
ただじっとしていられなかった。
気がつくとデイルームの前にいた。
何気なく中を見る。
そこに弟がいた。
一人で椅子に座っていた。
私と同じだった。
私は中へ入り、弟の隣に腰を下ろした。
窓の外は真っ暗だった。
病院の灯りだけが夜の中に浮かんでいる。
やがて弟が言った。
「眠れないな」
私はうなずいた。
「そうだな」
それだけだった。
それから私たちは昔話を始めた。
子どもの頃のこと。
近所で遊んだこと。
兄弟げんかをしたこと。
父に叱られたこと。

母に怒られたこと。
どれも他愛のない話ばかりだった。
翌日に大きな手術を控えている兄弟とは思えないような話だった。
だが、その方がよかった。
手術の話を始めれば、お互い余計なことを考えてしまう。
だから自然と昔話になったのだと思う。
時間は静かに流れていった。
やがて会話が途切れた。
沈黙が訪れた。
窓の外は相変わらず真っ暗だった。
その時だった。
弟が私の方を見た。
私は顔を向けた。
しばらく視線が交わった。
そして弟が口を開いた。
「兄貴」
私は何も言わずに見返した。
「兄貴、一生に一度だけの大サービスだからな」
私は返事ができなかった。
弟は窓の外へ視線を向けた。

それ以上、自分のことを語ろうとはしなかった。
ありがとうと言いたかった。
申し訳ないとも言いたかった。
だが、どちらも違う気がした。
何を言っても足りない。
どんな言葉も軽く思えた。
私は小さくうなずいた。
それが精一杯だった。
弟もうなずいた。
それだけだった。
しばらく二人とも黙っていた。
病院の灯りだけが夜の闇に浮かんでいた。
やがて時計は深夜を回った。
翌日は朝が早い。
私たちは立ち上がった。
病室へ戻る時間だった。
別れ際、私はもう一度だけ聞いた。
「本当にいいんだな」
弟は少し間を置いた。
そして静かに言った。

「大丈夫だ」

短い言葉だった。

だが、その一言には迷いがなかった。

私は黙ってうなずいた。

弟は自分の病室へ戻っていった。

私はその後ろ姿を見送った。

病室へ戻っても眠ることはできなかった。

考えていたのは移植の成功でも、自分の未来でもなかった。

ただ一つ。

弟が無事でいてほしい。

それだけだった。

人生で最も長い夜だった。

やがて窓の外が白み始めた。

十月六日。

運命の日の朝だった。

私はゆっくりと身体を起こした。

病室は静かだった。

もう眠る必要はなかった。

私は立ち上がった。

弟の思いを受け取りに行くために。

第九章　命のバトン

十月六日。

朝の光で目が覚めた。

ほとんど眠れなかったはずだった。

それでも頭は妙に冴えていた。

病室は静かだった。

窓の外には秋の青空が広がっている。

私はしばらくその空を眺めていた。

今日だった。

長い時間をかけてたどり着いた日だった。

看護師さんが病室へ入ってきた。

術前の確認が始まる。

血圧を測る。

名前を確認する。

ひとつひとつの手順が淡々と進んでいった。

私は言われるままに応じていた。

不思議なくらい落ち着いていた。

緊張していないわけではない。

だが、自分のことを考える余裕はなかった。

気になっていたのは弟だった。
今ごろ弟も準備をしているはずだった。
やがて手術着に着替えた。
ストレッチャーが病室へ入ってくる。
私は静かに横になった。
天井がゆっくり動き始める。
病室を出る。
廊下を進む。
照明が一つずつ頭上を流れていった。
私は黙ってそれを見ていた。
手術室の前でストレッチャーが止まった。
そこに弟がいた。
同じようにストレッチャーに横になっていた。
私たちは顔を見合わせた。
言葉はなかった。
昨夜、デイルームで十分に話していた。
もう何かを付け加える必要はなかった。
それでも私は弟から目を離せなかった。
その姿をしっかり胸に刻んでおきたかった。
周囲では医師や看護師たちが準備を進めていた。

移植は多くの人の力で成り立つ。
そのことを私はあらためて感じていた。
やがて時間が来た。
二人は別々の手術室へ入る。
その直前だった。
私は執刀医の方へ顔を向けた。
そして頭を下げた。
「弟をよろしくお願いします」
自分のことではなかった。
最後まで気になっていたのは弟だった。
健康な身体で手術を受ける。
その重みを知っていたからである。
医師は静かにうなずいた。
弟も何も言わなかった。
ただ、こちらを見ていた。
その表情を、私は今でも覚えている。
ストレッチャーが動き始めた。
弟の姿が少しずつ遠ざかっていく。
それが手術前に見た最後の姿になった。
私は天井を見上げた。

白い照明がゆっくり流れていく。
一つ。
また一つ。
昨夜のことがよみがえった。
デイルームの静けさ。
眠れない兄弟。
そして弟の言葉。
「兄貴、一生に一度だけの大サービスだからな」
私は静かに目を閉じた。
どれほど感謝しても足りないと思った。
その思いだけが胸にあった。
手術室の照明が視界いっぱいに広がった。
看護師さんたちの声が聞こえる。
準備が進んでいく。
手術台へ身体を移した。
背中に冷たい感触が伝わった。
麻酔科の医師が声を掛ける。
「これから麻酔を始めます」
私は小さくうなずいた。
そしてもう一度だけ弟の顔を思い浮かべた。

次に目を覚ます時。
私は弟の腎臓とともに生きている。
そう思いながら、私は静かに意識を手放した。

第十章　叫び声の向こう側

遠くで誰かの声が聞こえた。
「分かりますか」
誰かが私を呼んでいる。
まぶたを開けようとした。
だが身体は言うことを聞かなかった。
視界の中を白い光が流れていく。
天井だった。
私はどこかへ運ばれているらしかった。
周囲に人の気配がある。
誰かが話している。
だが言葉は意味にならなかった。
麻酔がまだ深く効いていたのである。
手術を受けたことだけは何となく分かった。

そして意識は再び遠のいていった。
次にはっきり目を開けた時、私は無菌室にいた。
白い天井が見えた。
規則正しい電子音が聞こえる。
ゆっくり瞬きをした。
すると近くから声が聞こえた。
「分かりますか」
顔を向ける。
医師と看護師さんたちが私を見ていた。
「手術は無事に終わりましたよ」
私は小さくうなずいた。
終わったのだ。
弟の腎臓は、もう私の身体の中にある。
その時、最初に浮かんだのは弟のことだった。
「弟は……」
かすれた声だった。
医師はすぐに答えてくれた。
「大丈夫ですよ」
私は目を閉じた。
それを聞くだけで十分だった。

しばらくすると、隣の部屋から声が聞こえてきた。
最初は何の声か分からなかった。
苦しそうなうめき声だった。
やがてそれは悲痛な叫び声になった。
無菌室の静けさの中に、その声だけが響いていた。
私は近くにいた看護師さんに尋ねた。
「隣の人は大丈夫なんですか」
看護師さんは少し言葉を選ぶような表情を浮かべた。
そして静かに答えた。
「弟さんです」
私は言葉を失った。
頭の中が真っ白になった。
あの声は弟だった。
私のために腎臓を提供した弟が、今その痛みと闘っていたのである。
再び叫び声が聞こえた。
胸が締め付けられた。
私は看護師さんを見た。
「私のことはどうでもいいです」
自分でも驚くほど強い口調だった。
「お願いですから、弟の痛みを何とかしてあげてください」

看護師さんは静かにうなずいた。
私は天井を見つめた。
その時だった。
私は初めて移植を後悔した。
私一人が透析を続ければよかったのではないか。
不自由でも、それでよかったのではないか。
なぜ弟の申し出を受け入れてしまったのだろう。
なぜ移植を選んでしまったのだろう。
頭の中はその思いでいっぱいだった。
手術が成功した喜びはなかった。
新しい腎臓への期待もなかった。
ただ弟に申し訳なかった。
申し訳なくてたまらなかった。
その頃の無菌室では、一週間にわたり看護師さんが二十四時間体制で付き添っていた。
昼も夜も、必ず誰かがそばにいた。
私は眠れなかった。
正確には、眠くならなかった。
身体は日に日に軽くなっていく。
頭も驚くほど冴えていた。
長い間、身体にまとわりついていた慢性的な疲労感が消えていた。

今思えば、私はずっと疲れていたのだと思う。
それが当たり前になり、自分でも気づかなくなっていた。
ところが移植後、その疲労感は嘘のようになくなった。
身体の中で何かが根本から変わっていく。
そんな感覚だった。
だが心は晴れなかった。
弟の声が耳から離れなかったからである。
眠れない夜、私は看護師さんたちとよく話をした。
弟のこと。
移植のこと。
そして、その痛みのこと。
ある夜、私は言った。
「こんなに苦しむなんて聞いていませんでした」
看護師さんは少し困ったような顔をした。
そして静かに言った。
「詳しく話すと、提供をやめる方もいますからね」
私は言葉を失った。
私が受けていた説明では、弟は腎臓を提供することになっていた。
だが実際には、それだけではなかった。
当時の説明では、腎臓だけでなく尿管と膀胱につながる弁の部分も一緒に採取しなければならな

いという。

そのため身体の側面を大きく切開する必要があった。

私はしばらく黙っていた。

そして言った。

「それでは本当に納得した上での手術とは言えないじゃないですか」

看護師さんは何も言わなかった。

私もそれ以上は言わなかった。

ただ弟の痛みだけが胸に重く残っていた。

三日ほど過ぎた頃だった。

あの叫び声が聞こえなくなった。

私はそこで初めて少しだけ安心した。

その頃には身体の変化もはっきり分かるようになっていた。

翌朝、目が覚めると尿バッグはいっぱいになっていた。

移植された腎臓が力強く働いていた。

大量の尿が出る。

顔のむくみが引いていく。

身体が軽くなる。

頭の中は驚くほど澄んでいた。

特に驚いたのは視力だった。

移植前には〇・六ほどだった視力が、一・二まで回復したのである。

窓の外の景色が鮮明に見えた。
病室の時計の数字もはっきり読めた。
腎臓が働くということが、これほど身体全体を変えるとは思ってもいなかった。
移植後三週間は面会謝絶だった。
家族にも会えない。
もちろん弟にも会えない。
無菌室にはテレビもラジオもなかった。
持ち込めたのは消毒液に浸したわら半紙と鉛筆だけだった。
時間だけはたっぷりあった。
私は鉛筆を手に取った。
病気が見つかった高校二年の夏。
卒業を目指した日々。
透析とともに過ごした時間。
移植前夜のこと。
書き始めると、次々と言葉が出てきた。
後にこの本の原型となる原稿は、この無菌室で生まれた。
ある日、看護師さんが言った。
「弟さん、もう歩いていますよ」
それから弟の様子が少しずつ伝わってきた。
術後四日目には歩行を始めていたこと。

傷を押さえながら病棟を歩いていたこと。
さらに十階から一階まで階段を下り、また十階まで上るリハビリを続けていたこと。
三日間、何度も何度も繰り返したという。
そして術後八日目。
弟は退院した。
職場にも復帰したと聞いた。
私はしばらく窓の外を見ていた。
秋の空は高かった。
私の身体の中では弟の腎臓が働いている。
そして弟は、もう日常へ戻っている。
それだけで十分だった。
無菌室には静かな時間が流れていた。
私は再び鉛筆を手に取った。
窓の外では秋の雲がゆっくり流れていた。
新しい腎臓とともに流れ始めた時間の中で、私は自分の人生を書き始めていた。

第十一章　東京での療養生活

無菌室を出てしばらくすると、退院の話が出るようになった。
移植後の経過は順調だった。
新しい腎臓はしっかり働いていた。
検査結果も安定していた。
だが、退院したからといってすぐに秋田へ帰れるわけではなかった。
移植後しばらくは防衛医科大学校病院で経過観察を受ける必要があったのである。
そこで私は東京に残ることになった。
お世話になったのは母の弟夫妻だった。
二人は東京芝信用金庫の女子寮で寮長をしていた。
戸越銀座商店街の中にある七階建ての寮だった。
七階には行員が入っていなかった。
私はその部屋を使わせてもらうことになったのである。
利用できたのは一階の寮長室と七階だけだった。
女子寮なのだから当然だった。
それでも私にとっては十分だった。
安心して身体を休められる場所があるだけでありがたかった。
こうして私の東京での療養生活が始まった。
療養生活は三か月ほど続いた。
月に二度、防衛医科大学校病院へ通う。

採血をする。
診察を受ける。
薬を調整する。
そんな生活だった。
検査結果は順調だった。
新しい腎臓も安定して働いていた。
身体も日に日に楽になっていった。
朝起きても疲れが残らない。
頭もすっきりしている。
歩いても息が切れない。
透析を受けていた頃には当たり前ではなかったことばかりだった。
そんな私の楽しみが夕方の散歩だった。
寮を出れば、そこは戸越銀座商店街だった。
昼間は比較的静かだった。
ところが午後四時頃になると様子が変わる。
店の人たちが店先へ品物を並べ始めるのである。
八百屋が野菜を並べる。
魚屋がその日の魚を並べる。
惣菜屋からは揚げ物の香りが漂ってくる。
威勢のいい声も聞こえてくる。

通りには少しずつ人が集まり始める。
買い物かごを提げた主婦が立ち止まる。
仕事帰りの人が店先をのぞき込む。
学校帰りの子どもたちが走り抜けていく。
顔なじみらしい客と店の人が笑いながら話をしている。
そんな光景が毎日のように繰り返されていた。
私はその商店街をゆっくり歩いた。
特に何かを買うわけではない。
ただ歩いているだけだった。
それでも楽しかった。
商店街には人の暮らしがあった。
夕飯の支度をする人がいる。
仕事を終えて帰る人がいる。
明日の商売の準備をする人がいる。
どこにでもある夕方の風景だった。
だが私には、それがとても新鮮に見えた。
今思えば、私は商店街を見ていたのではなかったのかもしれない。
普通に暮らしている人たちの日常を見ていたのである。
病気が見つかってから長い年月が過ぎていた。
透析が始まってからは、病気を中心に生活していた。

次の透析まで何日あるか。
どれだけ水分を飲めるか。
何を食べるか。
いつも病気が隣にあった。
ところが、その頃の私は違った。
こうして商店街を歩いている。
人の流れの中にいる。
夕方の風を感じている。
その当たり前のことが、なぜかうれしかった。
私は少しずつ普通の生活の中へ戻ろうとしていたのである。
東京での三か月は、身体を回復させるためだけの時間ではなかった。
移植という現実を受け入れる時間でもあった。
透析患者として生きていくはずだった私が、今は弟の腎臓とともに生きている。
その事実を少しずつ自分のものにしていった。
焦る必要はなかった。
静かな時間の流れの中で、少しずつ受け入れていけばよかった。
やがて三か月が過ぎた。
検査結果は安定していた。
ある日の診察で主治医から言われた。
「もう秋田へ戻って大丈夫でしょう。」

私は胸をなで下ろした。
ようやく帰れる。
そんな気持ちだった。
母の弟夫妻にお礼を言った。
本当に世話になった。
三か月という時間は短いようで長かった。
荷物をまとめ、私は東京を後にした。
列車の窓から外を眺めていた。
景色が少しずつ変わっていく。
高いビルが減り、田畑が増えていく。
見慣れた東北の風景が近づいてくる。
家族がいる。
仕事がある。
帰る場所がある。
それが何よりうれしかった。
三か月前。
私は透析患者として防衛医大へ入院した。
そして今。
弟の腎臓とともに故郷へ帰ろうとしている。
窓の外を流れる景色を眺めながら、私は静かに思った。

ようやく帰れる。
あの店へ。
あの町へ。
そして、自分の暮らしの中へ。

第十二章　日常という贈り物

秋田へ戻った翌朝、私はいつもの時間に目を覚ました。

しばらく布団の中で天井を見ていた。

不思議な感覚だった。

今日が透析の日かどうかを考えなくていいのである。

何年もの間、それが朝の習慣だった。

透析は週三回。

仕事の予定を立てる時も、旅行を考える時も、まず透析の日程を確認しなければならなかった。

だが、その必要はもうなかった。

私はゆっくり起き上がった。

窓の外には見慣れた秋田の朝が広がっていた。

その景色を見ながら、改めて故郷へ帰ってきたことを実感していた。

店へ出ると、いつもの景色があった。

変わらない店。

変わらない工具。

変わらない時計の音。

病気になる前から続いてきた場所だった。

私はカウンターの中へ入り、いつものように仕事を始めた。

時計を分解する。

部品を磨く。
組み立てる。
長年続けてきた仕事である。
手は自然に動いた。
だが身体は以前とはまるで違っていた。
疲れないのである。
夕方になっても身体が軽い。
集中力も続く。
透析を受けていた頃には考えられなかったことだった。
あの頃は、いつも疲労感があった。
それが病気なのだから仕方ないと思っていた。
だが今になって分かる。
私は想像以上に疲れていたのである。
移植後の身体は違った。
仕事を終えた後にも余力が残っている。
店を閉めてから散歩へ出ることさえできた。
それがうれしかった。
ある日、店のお客様が言った。
「顔色が全然違うな」
私は思わず笑った。

自分では毎日鏡を見ているので分からない。
だが周囲の人にははっきり見えていたのだろう。
病気とともに過ごした十数年間は、知らず知らずのうちに私から多くのものを奪っていた。
体力だけではない。
物事を楽しむ余裕もそうだった。
移植後、私は少しずつそれを取り戻していった。
もっとも、順調なことばかりではなかった。
毎日決まった時間に薬を飲まなければならない。
免疫抑制剤である。
飲み忘れることは許されない。
風邪にも気を付けなければならない。
人混みでは神経を使う。
些細な発熱でも気になる。
移植したら終わりではない。
移植してから始まる管理もある。
それは主治医から何度も言われていた。
私は薬の時間を守った。
手洗いを徹底した。
定期検査も欠かさなかった。
弟から受け取った腎臓だった。

粗末に扱うわけにはいかなかった。
仕事にも少しずつ以前のリズムが戻ってきた。
時計店にはさまざまなお客様が訪れる。
時計の修理を依頼する人。
電池交換に来る人。
ただ世間話をしに来る人。
私はそんな時間が好きだった。
病気中心だった生活が、少しずつ人とのつながり中心の生活へ戻っていったのである。
夜になると、無菌室で書き始めた原稿を書き進めた。
病気が見つかった高校二年の夏。
透析の日々。
移植前夜。
弟のこと。
書いていると、忘れていた出来事まで思い出した。
ペンを置いて考え込む夜もあった。
だが書くことは、自分の歩いてきた道を確かめる作業でもあった。
移植から数か月が過ぎた頃だった。
ある日、私はふと気付いた。
透析患者だった頃の生活を思い出す日が少なくなっているのである。
以前は毎日のように考えていた。

病気のこと。
透析のこと。
将来のこと。
だが今は違った。
朝になれば店を開ける。
仕事をする。
夕方になれば店を閉める。
家へ帰る。
そんな普通の毎日だった。
私が長い間欲しかったものは、特別な人生ではなかった。
普通の人生だったのである。
普通に働くこと。
普通に食事をすること。
普通に明日を迎えること。
その価値を、私は病気を通じて知った。
そして、その普通の日々は決して自分一人の力で取り戻したものではなかった。
弟がいた。
両親がいた。
叔父夫婦がいた。
医師や看護師さんたちがいた。

多くの人たちの支えがあった。
そのことだけは忘れてはいけないと思った。
店を閉めた後、一人で空を見上げることがある。
秋田の空は広い。
その空を見ていると、不思議と心が落ち着く。
移植前には想像できなかった場所まで来た。
それでも人生は続いていく。
特別な一日ではなく、変わり映えのしない毎日を積み重ねながら。
私はそのことを幸せだと思えるようになっていた。
そして、その穏やかな日々の中で、少しずつ考えるようになる。
なぜ自分が移植を受けることになったのか。
なぜ弟は迷うことなく決断できたのか。
そして、自分はこの先をどう生きるべきなのか。
その問いへの答えを探す時間が、静かに始まろうとしていた。

第十三章　受け継いだもの

移植から一年が過ぎた。

季節は再び秋を迎えていた。

店の前を吹き抜ける風は少し冷たくなっていたが、私の身体は元気だった。

検査結果も安定していた。

仕事も以前と変わらないペースで続けられていた。

気がつけば、移植後の生活が当たり前になっていた。

朝起きる。

店を開ける。

時計を修理する。

お客様と話をする。

店を閉める。

病気になる前なら、ごく普通の日常だった。

だが私にとっては違った。

一つひとつが失いかけたものだった。

そして多くの人に支えられて取り戻したものだった。

時々、自分の腹部の傷跡を見ることがあった。

移植手術の跡である。

その傷を見るたびに思い出す。

防衛医科大学校病院のことを。

無菌室のことを。
そして弟のことを。
私は自分の傷を見て思い出す。
だが弟はどうだろう。
私よりはるかに大きな傷を残している。
あの悲鳴のような叫び声を、私は忘れることができなかった。
時間が経っても消えなかった。
むしろ年月とともに、その意味を深く考えるようになった。
移植直後の私は後悔していた。
私一人が透析を続ければよかったのではないか。
何度もそう考えた。
だが今は少し違う。
後悔しても時間は戻らない。
弟が引き受けた痛みも消えない。
だからこそ、その思いに恥じない生き方をしなければならないと思うようになった。
それが私にできる唯一の恩返しだった。
弟は相変わらずだった。
自分のことを語らない。
移植の話もほとんどしない。
ある日、二人で食事をした時だった。

私は改めて礼を言った。
「本当にありがとうな」
弟は苦笑した。
「だから何回言うんだよ」
あの日と同じ返事だった。
移植前。
病院で何度も聞いた言葉だった。
私は思わず笑った。
弟も少し笑った。
それ以上の会話はなかった。
だが、それで十分だった。
兄弟とはそういうものなのかもしれない。
言葉にしなくても伝わることがある。
長い病気との闘いの中で、私は多くの人に支えられてきた。
両親。
弟たち。
親戚。
友人。
住職。
恩師。

医師や看護師さん。
振り返れば、一人で乗り越えたことは一つもなかった。
それまでの私は、自分の力で頑張らなければならないと思っていた。
人に迷惑をかけてはいけないと思っていた。
助けてもらうことに、どこか後ろめたさがあった。
だが病気は、それを許してくれなかった。
透析もそうだった。
移植もそうだった。
人の支えなしに生きてはいけなかった。
そして今なら分かる。
支えられることは弱さではない。
支えられた分だけ、誰かを支えればいいのである。
弟は私に腎臓をくれた。
だが本当に受け取ったものは、それだけではなかった。
生き方だった。
覚悟だった。
人を思う気持ちだった。
あの日、弟は迷わなかった。
私なら同じことができただろうか。
今でも分からない。

だからこそ尊敬している。
兄である私が、弟を尊敬しているのである。
人生とは不思議なものだと思う。
十七歳の夏。
病気を告げられた時、私は自分の人生が終わったような気がした。
将来への希望も見えなかった。
普通に生きることさえ難しいと思っていた。
だが人生は続いた。
透析の日々も。
移植への迷いも。
すべて過ぎ去ってみれば、今の私につながっている。
もちろん病気にならない人生の方がよかった。
そんな思いは今でもある。
だが病気になったから出会えた人もいる。
学んだこともある。
気付けたこともある。
失ったものばかりではなかった。
店を閉めたある日のことだった。
私は店の前に立ち、夕暮れの空を見上げていた。
秋田の空は広い。

雲がゆっくり流れていく。
遠くで子どもたちの声が聞こえる。
車が通り過ぎる。
どこにでもある夕方だった。
かつて私が失うかもしれないと思った日常が、そこにあった。
私は深く息を吸った。
普通に生きられること。
普通に働けること。
普通に家族と話せること。
それは決して当たり前ではなかった。
だから大切なのだと思った。
空を見上げながら、ふと弟の言葉を思い出した。
「兄貴、一生に一度だけの大サービスだからな」
あの夜、私は返事ができなかった。
だが今なら言える気がした。
ありがとう。
本当にありがとう。
心の中でそうつぶやいた。
空は静かだった。
そして私の人生もまた、静かに流れていた。

終章　託された時間

店を閉めた後、外へ出る。
空を見上げるためだった。
秋田の空は昔と何も変わらない。
高校二年の夏。
病気を告げられた日も。
透析室へ通っていた頃も。
移植を迷っていた頃も。
同じ空がそこにあった。
振り返れば、思い通りにならないことばかりだった。
病気によって人生の予定は何度も書き換えられた。
それでも歩みは止まらなかった。
私の暮らしは、再びこの町へ戻っていた。
朝になれば店を開け、お客様を迎える。
手の中の時計と向き合う。
夕方になれば店を閉める。
日々は静かに過ぎていく。
特別なことは何もない。
だが、その繰り返しが心地よい。

店には今日も時計の音が響いている。
古い時計もあれば、新しい時計もある。
長い年月を刻み続けてきた時計もある。
どれ一つとして同じものはない。
人の人生もそれに似ているのかもしれない。
思いがけない場所で立ち止まることがある。
遠回りをすることもある。
自分では選べない出来事もある。
それでも時計の針は進み続ける。
人もまた、その流れの中を歩いていく。
昔は先のことばかり考えていた。
将来のこと。
病気のこと。
まだ起きてもいないこと。
答えのない問いを追い続けていた。
今は違う。
目の前の仕事に向き合い、一日を終える。
それで十分だと思えるようになった。
店の前に立つ。
遠くで子どもたちの声が聞こえる。

どこかの家から夕飯の支度をする音が聞こえる。
風が静かに通り過ぎていく。
どこにでもある夕暮れだった。
私はその風景をしばらく眺めていた。
あの日と変わらない空が、そこにあった。

あとがき

この本では、腎移植を受け、新しい日常へ戻るまでを書いた。
けれど、人生はそこで終わりではなかった。
移植後も時は流れた。
平成六年には現在の妻と長慶寺で仏前結婚式を挙げた。
平成十一年には日本移植者協議会の理事となり、移植者のための活動に関わるようになった。
平成十五年には、第十四回全国移植者スポーツ大会 in 能代を開催する機会にも恵まれた。
移植によって得た時間は、私の想像を超えて広がっていった。
しかし、病気とのつきあいが終わったわけではなかった。
平成二十年。
移植から十六年が過ぎた頃、長い間働き続けてくれた腎臓は静かにその役目を終えた。
私は再び透析へ戻ることになった。
その後も、大動脈弁置換術、冠動脈ステント留置術、下肢動脈拡張術、心筋梗塞に対するカテーテル治療、冠動脈バイパス手術、小脳梗塞、下肢動脈バイパス手術と、さまざまな病気や手術を経験した。
平成二十五年には、秋田県で初めて在宅血液透析を導入した。
以来、自宅で毎日透析を続けている。
一方で、患者会活動にも深く関わるようになった。
秋田県腎臓病患者連絡協議会の会長を務め、その後は全国腎臓病協議会の理事として活動する機

会もいただいた。

かつて透析患者として悩み、不安を抱えていた私が、今度は患者の声を届ける立場になっていた。

それもまた不思議な縁だった。

振り返ると、移植後の人生だけでも、もう一冊の本になるほどの出来事があった。

再透析。

在宅血液透析。

心臓病。

脳梗塞。

患者会活動。

本書は、移植によって新しい人生へ踏み出すまでの物語である。

だが、その先にも続きがある。

病気の形は変わっても、人生は続いていく。

そして、その中で出会う人や出来事によって、人はまた前へ進んでいく。

またいつか、その続きを書く日が来るかもしれない。

まだ書き残していることがあるからだ。

令和八年十一月

村越　正道